

特集：オンライン教育の質保証をいかに実現するか

趣 旨

大学にオンライン教育を導入することについては、従来からその可能性とともに必要性が指摘されてきた。しかし、大学の現場では積極的に導入しようとする動きは鈍く、全体としてみれば普及とはほど遠い状況にあった。それが、2020年初めからのコロナ禍により、どの大学においても従来型の対面式授業の実施が困難になったことから、代替策としてオンライン教育を導入することを余儀なくされた。その結果、オンライン教育は、現状ではかなりの程度普及するに至った。コロナ禍は今後もしばらくは続くことが予想されるため、各大学ともオンライン教育への取組を本格化させることが必要になっている。そのための体制も整備されつつある。

オンライン教育は、大学法人の統合や大学間連携を模索する動きとの関連においても、注目されている。法人統合や大学間連携とともに、授業等でも一部を共同で実施する動きもみられる。そこでは、大学間の地理的な距離や時間的な制約を解消すべく、オンライン教育の可能性が注目され、実施に向けた準備が着実に進められている。

オンライン教育実施の取組も多様なかたちで進められている。対面式の授業とeラーニングを組み合わせたブレンディッドラーニングの取組もその一つである。オンライン教育は、比較的活用しやすいように思われる講義科目以外に、実験・実習科目等での実施も試行されている。これらは、従来型の対面式授業を補完する手段としてだけでなく、対面式授業では十分に望めない効果をあげる手段としての期待も高まっている。

オンライン教育については、可能性と必要性が叫ばれながら、長年にわたり実施が限定的であったことにみられるように、伝統的な授業のあり方に対する教員等のこだわりは強い。コロナ禍が収まった後も、現在と同程度にオンライン教育を継続的に実施できるかどうかは微妙である。普及させるためには、多くの課題についての検討やその成果に基づく試行が必要といえる。

本特集では、オンライン教育の可能性を引き出すとともに、その

質を保証するためにさまざまな工夫をしている大学の研究者から、それぞれの取組状況について報告をしていただく。その状況をふまえて、オンライン教育をさらに普及させるために、必要な工夫や条件整備等の課題がいかなるものかについて考えたい。とくに、オンライン教育やブレンディッドラーニングで教育の質保証を図ることは可能なのか、いかにして質保証の仕組みを整備すべきなのかについて一定の結論を得たいと考える。

筆者各氏には、以下のような点にできる範囲内で言及するようにお願いした。

- 1) オンライン教育の実施・普及とともに教育の質保証を図るために、大学組織と教職員のそれぞれにとって、どのような課題があるのか。それにいかに取り組むべきか。
- 2) オンライン教育の可能性を引き出すために、授業や学生の学習支援において、どのような活用方法があり得るか。
- 3) 対面式授業と e ラーニングとの組合せについて、教育・学習効果を高めるために、いかなる工夫が必要か。
- 4) 実験・実習指導をオンラインで実施することは可能か、いかにして可能にするか。

山内氏は、コロナ禍下での大学教育のオンライン化と質保証につき論じている。九州大学と立教大学の調査に基づき、オンライン授業への学生の反応について検討した。同授業の評価は1年生は低いが2年生以上は高い。科目によっては十分学習できていること、アクティブ・ラーニング採用の授業で評価が高いこと、その一方で孤独・孤立感を感じる学生も4割程度いること等を指摘した。質保証方策として、少人数授業でハイブリッド学習の採用、オンライン授業を可能にするラーニングコモンズの整備を提案している。

飯吉氏は、大阪市立大学と大阪府立大学が大学統合を控えて、キャンパスの複数分散化による各種課題を抑制するために、オンライン教育の積極活用を追求していることに言及した。オンライン授業の前提として、PC 必携化、時間割の統一、LMS の統合、多様なタイプのオンライン教育を実施するための環境整備や教育・学習支援等が課題であることを明らかにした。また、オンライン教育の質保証について、従来からの取組をまず継続することの重要性を指摘している。

田口・鈴木氏は、オンライン授業・ハイブリッド型授業の質保証のあり方について、京都大学のオンライン授業支援体制やその下での授業実践をもとに論じた。同大学では、従来から行ってきた授業支援の取組をベースに、コロナ禍下でオンライン授業促進支援に向けて、ICT活用教育のためのサポートサイトの構築、講習・相談会や学内教員調査等の取組を展開している。オンライン授業の質向上に必要な課題を、同時双方向型・オンデマンド型・ハイブリッド型の授業タイプごとに提起している。

森鼻氏は、オンライン環境での物理学実験・実習指導のあり方について自らの実践に基づき論じた。実験は対面形式の方が学習効果が高いと思われるが、オンラインでの実施を余儀なくされ、Zoom等を用い双方向型で実施した。オンラインでの体験が難しい実験では装置見学・体験実験の希望する学生が多い。オンラインの長所には、実験途中の個別指導がしやすいこと、チャット機能活用で学生が質問しやすいこと等があり、課題としては、対面でないと習得が難しい事項があること、細かな点での指導が難しいこと等を指摘した。

中島氏は、ハイフレックス授業について授業設計上の特徴を整理し、教育の質向上につなげる方策を検討した。同授業の設計には、学生に有意義な選択肢の用意、選択肢間の同等性の確保、選択肢間の再利用性の確保、アクセシビリティの確保が必要であることを指摘した。同授業導入の長所と課題を、学生・教員・機関ごとに整理したうえで、同授業を実践するための指針を示した。さらに、高等教育研究者・先導者には、新たな授業方法を参照したりその特徴をとらえる語を用いたりする際に慎重さが必要なことを指摘した。

コロナ禍が当面続く事態が想定されるなかで、オンライン授業の実施はさらに必要とされよう。授業の質を高め学生によりよい学びを保障するための考察を深める一助として、本特集の論考が多くの教職員に読んでいただけることを願っている。

編集委員長 夏目達也